

## ゴードン会議の印象

本間さと

北海道大学医学部生理学第一講座

Gordon Conference on Chronobiology は、本年は4月30日より5月5日まで、イタリア、トスカナ州の山中にある中世の町バルガを見おろすリゾートホテルで開催された。4年前から一回おきに米国とヨーロッパで交互に開かれるようになったゴードン会議であるが、今回はイタリアということで通常よりも早い季節に開催された。日本人は、井上慎一山口大学教授と北大から篠原一之氏と私の3名、現地参加がチューリッヒ大学留学中の遠藤拓朗氏で、同じホテルで同時に開催されたアンジオテンシン分科会の、日本人大集団と対象的であった。会長がオランダの Serge Daan であったため、プログラムの内容は、前回と比較して molecular が少な目で、リズムの機能解析が多く、第一日目がすべて human のリズムというのも特徴的であった。まだハーバードの医学生である D.Welsh の SCN disperse cell culture における電気活動記録（ほとんどすべての SCN ニューロンがフリーランリズムを示し、desynchronization もみられる）、J.Takahashi の教室の M.Vitaterna の、tau mutant mouse リズム解析の最新情報

等、若い研究者のすぐれた発表が目についた。篠原氏の SCN スライス培養での2つの振動体の存在を示した発表も、振動体のカップリングに新しい問題を提起し、大いに注目された。Reppert の melatonin receptor の研究は哺乳類や鳥類での各種 subtype と分布、類似等まで発展していた。Tobler の睡眠調節機構や、Ruff の体温リズム調節等、どちらかという「先端的」よりもじっくり時間をかけて行った研究成果が多かった。最終口演、F.Karsh の sheep seasonal clock も、時間が迫る中で、歯切れの良い季節リズムの話であった。イタリア流ハプニングも多く、第一日目トップバッターだった私は話の途中でプロジェクターが動かなくなり、発表半分で discussion に移行、その後もプロジェクターの故障が続出し、聞いている方もはらはらし通しであった。

会期中はさわやかな晴天に恵まれ、昼食と夕食はワイン飲み放題でパスタが前菜のフルコースで、セミナールームにいるよりもレストランでの議論の方が多かった5日間であった。